

諧 謔 の レ ト リ ッ ク

— Stevens の “Anecdote of the Jar” —

有 元 清 城

Rhetoric of Humor

— Stevens’ “Anecdote of the Jar” —

Sugaki ARIMOTO

極論するならば Wallace Stevens については、「彼の詩はすなわち詩論であり、詩論は詩である」と言うことが出来るであろう。彼の初期の詩 “Anecdote of the Jar”⁽¹⁾ が、Stevens 研究の初期から今日に至るまで多くの批評家の注意を引いたのは、この詩が Stevens の終生の問題であった想像力 (Imagination) と実在 (Reality) の関係をテーマとしたものであり、Stevens の詩論と彼の詩の全体を解明するための手掛りを与えてくれる詩の一つと考えられたからである。しかし彼の詩の本質はむしろこのような思弁的な論理の外にあり、彼の詩の多くは諧謔^{かたち}という容、Humor とか Irony, あるいは Comic spirit といった広い範囲を含む性格のものによって、真実への接近を図るものであって、“Anecdote of the Jar” はその一つの例と考えるべきである、そしてこの諧謔は彼の意識構造のどのような仕組から生れたものであるかを明らかにすることによって、われわれは初めて Stevens の本質を知ることが出来るのである。

ANECDOTE OF THE JAR

I placed a jar in Tennessee,
And round it was, upon a hill.
It made the slovenly wilderness
Surround that hill.

The wilderness rose up to it,
And sprawled around, no longer wild.
The jar was round upon the ground
And tall and of a port in air.

It took dominion everywhere.
The jar was gray and bare.
It did not give of bird or bush,
Like nothing else in Tennessee.

壺 の 奇 談

私はテネシー州に一つの壺を置いた。
それは丸く、一つの丘の上にあった。
それがために怠惰な荒野は
その丘の周りを取り囲んだ。

荒野は壺に向って盛り上がり、

野性を失ってのたうちまわった。
壺は大地の上にまろやかに、
その丈は高く、その姿は空中にあった。

壺は至るところを支配した。
灰色で裸のままの壺、
それは一羽の鳥もやぶも産みはしなかった。
テネシー州の他のどんなものとも違って。

I

ほとんどすべての批評家は、この詩に言及する時、この詩は想像力 (Imagination) と実在 (Reality) の相互作用を簡潔な形で示したものとしている。Stevens に関する最も新しい出版物である *Wallace Stevens: An Introduction to the Poetry* (Columbia U. P., 1977) の中で著者 Susan B. Weston は
……there are allegorical dimensions to the two images, with the jar suggesting man, imagination, and art, and the wilderness suggesting nature, reality, and unordered chaos. (p. 26)

(この二つのイメージには比喩的な広がりがある。壺は「人間」、「想像力」、「芸術」を暗示し、荒野は「自然」、「実在」、「秩序のない混沌」を暗示する。)

と言っているし、さかのぼって20年前に Newton P. Stallknecht⁽²⁾ は、この詩は「創造力の帝国主義的理論」(“imperialist theory of imagination”)を要約したものであるとした。更に彼はこの詩において作者の意図は次のようであると解釈した。それは荒野(wilderness)すなわち「物自体」を統一する調和を創り出すことによって、それぞれ独自の性格と構造をもっている個々の物体を突き止め、それによって実在(Reality)すなわち“Tennessee”そのものの本質を探求することではない。詩人の心はむしろ内に向けて働かし、自分自身の意識の中に潜んでいる創造力を確めようとしている。或いは荒野の圧力に抵抗して、自らの自主性を守ろうとしている。この詩はその雄々しい姿の描写なのである、と。

Stevens の *Opus Posthumous*⁽³⁾ の編者で、また Stevens の最も良い理解者、最も優れた批評家の一人である S. F. Morse⁽⁴⁾ も、この詩は「人間」と「物自体」、「芸術」と「自然」との対立を示すものであるが、そのどちらに優位を与えようとしているかを明らかにしていない。むしろこのあいまいさの中に詩人が目差す窮極的な調和がある、と考える。Morse によれば、このことは詩の構造(structure) そのものの中に示されている。固定されたパターンに陥らないで、しかも見事に創り出された均整、「整然とした四行連句と微妙に組み立てられた子韻」(the neat quatrain and subtly manipulated consonance)はこの対立そのものが本来の姿であることを暗示していると Morse は言う。

Stallknecht がこの詩の目差す方向として主観の創造的活動に注目しているのに対し、Morse は客観すなわち Tennessee の本質の解明という点を重視する。つまりこの詩は、Morse によれば、人間対自然という問題を借りて、その関係のあいまいさの中に Tennessee の正しい姿を見ようとしたのである。(Rather than choosing art or nature, it [the poem] attempts to get Stevens' perception of Tennessee “right,” in all its ambiguity.)

しかしこれらの批評家たちのすべてはこの詩を「詩」として認めている。Stallknecht は、この詩は「優雅な韻文にまとめられた既製の哲学的論議」ではなくて、「哲学的な意図をもった真実の詩」であると言い、Morse も “in professing or seeming to profess that it is a kind of joke, the poem becomes something more.” (それが一種の諧謔であることを言明し、または言明するような様子を見せることによって、この詩はそれ以上の何物かとなっている。)と言っている。Morse のこの諧謔(“joke”)ということばに注意したい。この詩は一見大真面目に見えて実はその中に微妙な諧謔をみながらせている。真面目と諧謔とは完全に重ね合わせる

ことの出来るわく組の中に共存しつつその間に微妙な緊張をはらんでいる。この緊張の中から詩人は真実を創り出そうとしている。この緊張の両極である“jar”と“Tennessee”とは、Randall Jarrell⁽⁵⁾ が言ったように、「精神を当てもなく自由に遊ばせること」(“just fooling around”)によって詩人が自分の意識の中に浮び上がらせたものである。そしてこれらを奇妙な対立の位置に置き、両者の間にあたかも存在するかのような相互作用を創造したのは外ならぬ詩人の諧謔的精神であった。諧謔とはこのような不合理と思われる関係の中に真実を見出そうとする精神の働きのなのである。

II

われわれは諧謔の最初の匂いをこの詩の第一行にかぎつけることが出来る。その唐突さ、不用意とも思われる率直さを詩人は楽しんでいるかのようである。この行で注意しなければならないのは“placed”とゆう動詞である。それは“put”でも“set”でもなく、“rest”でも“leave”でもない。“placed”は作為者の意志と配慮とを表わしている。その動作はいかにも出し抜けに見えてしかも慎重である。それはそれにつづくものの重大さを暗示している。

この第一行は日本の連句における発句と同じ重要性を持っている。短長調四歩格の軽快さとイメージの大胆さを併せ持っているこの一行は、キュービズムの幻想と童話的な楽しささえ感じさせる。いずれにせよそれは詩人の雄々しい出立であり、Reality 解明の第一歩なのである。

もしこれを連句の発句に擬するならば、それはそれなりにある程度独立した意味を持たねばならない。それがためにわれわれが当然関心を持たねばならぬのは“jar”と“Tennessee”の二語のもつ含蓄(connotation)であり、それらがこの一行の中でどのような意味を持つかということである。Tennessee という地名は、それについて全く無知な日本人に対しては、何の連想も感情も引き起さないであろう。芭蕉の句「夏の月御油より出でて赤坂や」の中の御油と赤坂という二つの地名は、地元の人とは別として、現代の日本人の多くには恐らくなじみの薄いものかも知れぬ。しかしそれが昔の東海道の相隣る二つの宿場であることを知るならば、この句の理解は少しばかり容易となってくる。まして五十三次を旅した江戸時代の人々に取ってはなつかしい地名であったにちがいない。この句は本来はこの二つの宿場が距離的に接近していたことと夏の夜の短いこととの対比のためにのみ持ち出された、談林風の機知の産物であり、そこに漂う一種の諧謔がその生命であった。しかし今ではこの句はすでに作者の手を離れて美的感覚に基く批評と鑑賞の対象となってしまうている。つまりこの二つの地名の中の「

油」と「赤」という二つの文字が持っている含蓄、特にその色彩感覚と音感がこの句が優れたものとされる原因となっている。それらは蒸し暑い日本の夏の夜の庶民生活を連想させ、その色は月に乗り移って明け易い夏の夜の幻想をかもし出す。ところで芭蕉の句では月は「自然」であり、御油と赤坂は人間臭い庶民的な情緒に満ちた、言わば当時の文化の代表であるのに対し、Stevensの第一行では、“jar”が文化を代表し、“Tennessee”は野性的な自然を代表する。前者では月は短い夏の夜をまたたく間に動き移るのに対し、後者では“jar”は静止して動かない。それはともかく芭蕉の句の中で「御油」と「赤坂」という二つの地名が持つ重要性和Stevensの詩の中の“Tennessee”が持つそれとの間には根本的な違いはない。

III

Morse がその著書の中でこの詩を取り上げているのは、Stevensの書簡が彼の詩の解釈にどんなに有用な手掛りを与えてくれるかということを中心とするためである。1966年に発刊された書簡集⁽⁶⁾がStevensの研究家に与えた恩恵は測り知れないものがあるが、その中でTennesseeへの言及を含む書簡が五通ある。(1918年4月27日, 28日, 30日, 5月1日, 6月5日)この外初期の日記の中に言及が二箇所ある。(1905年8月10日, 11日)これらはいずれも旅の途中で書かれたものである。

StevensはTennesseeについてくわしく知っていたわけでない。最初の旅は学生時代の急ぎ旅で、ただこの州を通過しただけだったらしい。二回目は保険会社の社用の旅で、州内の四つの都市でそれぞれ一泊するという、やはり余裕のない旅であった。従って彼はTennesseeのことがよくわからぬというじれったさを示すとともに、一方では知り得た限りの印象を率直に述べようとする。最初の旅では“*We are approaching Tennessee—green, hilly, sunny-cloudy place.*”

(われわれはテネシー州に近付きつつある——緑の、丘の多い、晴れたり曇ったりする場所に。)と書き、翌日の“*Got through red Tennessee*”(赤いテネシー州を通り過ぎた。)ということばで終わっている。それから13年後には“*I have always been of two minds about Tennessee. Sometimes I like it and sometimes I loathe it.*”(私はテネシーについてはいつも心が二つに分れていた。ある時は私はそれが好きになり、ある時はそれをきらった。)と感想を述べている。彼は凍るような北の厳冬に心を寄せるとともに、太陽の光がさきさんと降り注ぐ、明けっ放しの南部メキシコ湾に面した地方を特に愛していた。北部と南部の間にあるTennesseeは彼に取っては不安定なもの(“*an uncertainty*”)であった。ただKnoxville市では附近

の風景を描写し、植生の豊かさに触れて、この土地に対する好感を示している。更にElizabethton市では *I noticed the other day that O. Henry, in one of his letters, asked, “Is it possible for anything to happen in Nashville?”* Certainly not without outside help. This applies to the state as a whole. I begin to think of it as Pope thought of London: as a “*dear, damned, distracting place.*”

(オ・ヘンリーが彼の手紙の中で、「ナッシュビルで何か事が起るなんてことがあり得るだろうか」という疑問を発していることに先日気付いた。確かに外部からの助けなしでは不可能だ。このことは州全体についても言える。私はロンドンについて「なつかしい、憎らしい、心をまどわすようなところ」と言ったポップと同じようにこの点を考えるのだ。)

と書いている。Morseは上述の印象や、その他Johnson Cityでの経験が“*Anecdote of the Jar*”の中に含まれているあいまいさ(ambiguity)を解く手掛りを与えてくれると言う。⁽⁷⁾

元々Tennesseeは北(the North)と南(the South)の中間に位して辺境の名残りを多分に留めた半未開の地であった。そして前後二つのアクセントにはさまれた三音節のこの地名は、その横に低く長く伸びた語形からして、この州の地理的な形態を不思議にも暗示している。幅110マイル、長さ432マイルの横に長いこの州の東部にはAppalachian山脈やその支脈Great Smoky山脈がつまり、中にはMississippi河以東最高の山岳も含まれている。中央部には多くの谷、湖、溪流を含むCumberland高原が広くつまり、また農業牧畜の盛んな中央盆地もある。西に行くに従って低くなり、森林に恵まれた高台などもあるが最後にはMississippi河流域の豊かな低地となる。この複雑な地形と温暖な気候、それに適当な雨量もあって、この州は動植物の種類の豊富な点では全米に比がないと言われる。またこの地方の人々は戸外に出て活動することが多く、人間の生活は大抵と密接な関係を持っている。郷土史家のことばを借りれば、

……for long generations, Tennesseans were an outdoor people. This was true not only for the hunters, trappers, surveyors, farmers, lumbermen, but for most of the professionals as well.⁽⁸⁾

(昔からテネシー人は戸外の人々であった。このことは猟師やわな猟、測量技師、農夫、木材切出人ばかりでなく、大部分の知的職業人についても言えることであった。)

元々、東部13州のグループに入っていなかったTennessee州の地名はイギリス本国の地名とは無関係で、インディアン語から来ている。それはかつて開拓時

代には北と南との境界地帯に当たっていたし、また東と西との境界でもあった。それはこれらの対立する世界の葛藤の場であって、文化的にも複雑なものを持っていた。Stevens がかったの旅行の体験からこの詩を思い付いたのは幸運であった。一時的にもせよ周囲の世界を統一しようとする“jar”に相対応する混沌としての“wilderness”としてはこの州をおいて外には考えられないからである。人間文化の象徴である気取った澄し屋の壺が、その姿態の優美さと均整を道具として、素朴で無器用な荒野を支配しようとする。ところが“Tennessee”は“jar”の支配を受けるには余りにも野性的な vitality に富んだ複雑な世界であり、その複雑さの中にそれ自身の統一さえ持っていたのである。Tennesseeを題材とする数多くの著書を書いた前記郷土史家のことを再び借りてみよう。

……if there is unity in Tennessee's diversity, there is also tension and suspicion, humor and individuality, and above all, tenacity and vitality. (9)

(もしテネシーの複雑さの中に統一があるとすれば、そこにはまた緊張と疑惑、ユーモアと個性、そしてなかなく粘り強さと活力があった。)

これに対して“jar”はどんなものであるか。芸術的価値の高い工芸品であるのか。それともアメリカ現代詩集の注釈者 Gray⁽¹⁰⁾が言うように、密造酒を入れる壺であるのか。彼によれば jar は Tennessee 州では特にそのような連想を伴うという。そしてこの点がこの詩の comic な性格につながってゆくと Gray は考え、この詩と Edwin Arlington Robinson の“Mr. Flood's Party”との関連を認めようとしている。しかし Stevens の“jar”には Robinson の詩の中の“jug”のような庶民的なものは感じられない。しかし Gray が Stevens の“jar”を文化の代表者、“teacher of etiquette”、粗野な環境に礼節を教える“a gentile figure”と解説しているのは正しい。いずれにしても“jar”はギリシャの“Urn”でないことは確かであり、それを取巻く世界が“Arcady”ではなくて、新世界の半未開の地であることには疑いはない。Stevens は Frost や Whitman と同様アメリカ大陸の土から生まれた詩人であった。フランスの象徴詩やキュービズムの影響も、一生継続したフランス近代絵画への傾倒も、彼の中で十分消化され尽して彼を“Connecticut Yankee”に仕立てたのである。

IV

さてこの詩の全体構造はどのようであろう。すでに述べた通り、大胆で何か稚拙なものさえ含んでいる第一行の次に来る第二行

And round it was, upon a hill.

は、第一行と並立して詩の冒頭に安定感を与える。そして次に続く

It made the slovenly wilderness
Surround that hill.

という断定は、その中に含まれた音感——悠揚として穏やかな iambus の中に収められた 2, 4 行の脚韻, round, surround の internal rhyming, 反復される [I] 音のまろやかさ等によって自ずからに周囲の環境に対する“jar”の優位を確定的にする。

第一節と同様、[au] 音の internal rhyme の外、“tall”と“port”との、まるで勝ち誇るような assonance によって第二節は引続いて“jar”の勝利を讃美するかのようである。

更に第三節の第一行

It took dominion everywhere.

はまさに戦いの終結を宣言することばと思われる。しかし次の行で事態は急変する。脚韻によってさり気なくまとめられたこの couplet の二行目の“gray and bare”とゆう二つの単語がこのことを暗示している。“green hilly, sunny-cloudy”である“Tennessee”に対して、何一つ余分なものも持たず、溢れ出るものもない“jar”の端正さが 反ってきこちないもの、自然の持つ自由と豊かさを欠いたものと感じられるからである。

果せるかな最後の二行で“jar”の優位は一挙に覆るかのようである。

It did not give of bird or bush,
Like nothing else in Tennessee.

裸で、不毛で、空虚な“jar”は「与える」(“give”)ことは出来ないで、唯「取る」(“take dominion”)ばかりである。これに対して一旦支配を受けるかに見えた wilderness は実は“bird”や“bush”を無限に産み出す力を持っている。この行に含まれる [b] 音の alliteration の力強さと [ʃ], [θ], [s] 音などの連続する子音群の性急さは、“jar”の周辺を取巻く母音群や, [I], [r] 音などの穏やかで丸味のある響きとは対称的な強靱さと不屈な生命力とを暗示する。それはまた

It did not give……

Lke nothing else in……

という、“The Snow Man”の最後の二行を思い出させるような、Stevens 独特の幻術的韜晦的方法 (Weston の言う“syntactically created ambiguity”⁽¹¹⁾) によって一種の茫漠とした無限性すら与えられている。

“jar”と“Tennessee”との間の優位争いは永久に決着することはないであろう。そのことはこの詩の最後のことば“in Tennessee”が、第一行目の終りの“in Tennessee”につながって、完全な輪を形成していることによっても暗示されている。問題を提起しながらそれを未解決のまま残し、莞爾として沈黙を守るのは

Stevens の常套手段である。しかしそれは決して「手段」ではない。問題そのものが余りにも大きいのである。人間の意識を越え、人間の憶測の外に厳然として存在すると思われる「物自体」は、人間精神の及びもつかぬ巨大な存在と考える外はない。それは人間を威圧するかのようであるが、実はその存在が人間精神に取って窮極的な救いであるかも知れない。詩人としての Stevens はその存在の意味をただ「ことば」によって現わすことが出来るのみである。「ことば」は果して実在の真実を捕えることが出来るであろうか。「ことば」は結局は「比喩」に過ぎないのではないか。「比喩」としての「ことば」を認めない限り、実在それ自体が一つの「比喩」とならざるを得ない。一方では詩人は「比喩」としての「ことば」をそのままに楽しみたいという欲求をもつ。しかし根底には真実を知ることへの強い関心がある。このような「ことば」によってもし真実が現わされたとしても、それは真実の一つの“version”に過ぎない。無限の「ことば」から無限の“version”が生れてくる。人間の創造力は完結することのない活動である。Stevens は自らの創造力に自信を持っていた。彼は時には懐疑派 (skeptical) であり、あいまいさ (ambiguity) の信者であると評されながらも彼なりの信念を持っていた。一生保険会社の業務に打込み、しかも一方では詩人としての使命を忘れなかった Stevens は、ある時は “Money is a kind of poetry⁽¹²⁾” と主張する。彼は古い型のロマンチストではない。彼は一見して矛盾と思われるものの中に新しい調和と真実を見出した大胆な冒険家であった。

“Anecdote of the Jar” は Stevens の代表作ではないかも知れない。しかし彼の特徴をよく現わした優れた小品であることは確かである。この頃彼はすでに

“Dominion of Black,” “Sunday Morning,” “Peter Quince at the Clavier,” “Thirteen Ways of

Looking at a Blackbird” などの名作によって詩壇の一角に地位を占めた。しかし彼の前途には尚多くの完成すべき仕事があった。“Anecdote of the Jar” はそれに至るまでの一つの布石と考えてよいであろう。

注：

- (1) *The Collected Poems of Wallace Stevens*. New York: Alfred A. Knopf, 1972, p. 76.
- (2) Stallknecht, Newton P. “Absence in Reality: A Study in the Epistemology of the Blue Guitar.” *The Kenyon Review*, XXI (Autumn 1959), pp. 545-562.
- (3) *Opus Posthumous*. Edited with an Introduction, by Samuel French Morse. New York: Alfred A. Knopf, 1975.
- (4) Morse, Samuel French. *Wallace Stevens: Life as Poetry*. New York: Pegasus, 1970, pp. 90-93.
- (5) Jarrell, Randall. “The Collected Poems of Wallace Stevens.” *The Yale Review*, n. s. XLIV (March 1955). Reprinted in his *The Third Book of Criticism* (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1969), pp. 55-73.
- (6) Stevens, Holly, ed. *Letters of Wallace Stevens*. New York: Alfred A. Knopf, 1966.
- (7) *Ibid.* p. 91.
- (8) Dykeman, Wilma. *Tennessee: A Bicentennial History*. New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1975, p. 10.
- (9) *Ibid.* p. 3.
- (10) Gray, Richard, ed. *American Poetry of the Twentieth Century*. London: Cambridge University Press, 1976.
- (11) Weston, p. 27.
- (12) *Opus Posthumous*, p. 165.